

鼠径ヘルニアの腹腔鏡手術

やまなし

医療最前線

《 94 》

県立中央病院から

県立中央病院は、小児の鼠径ヘルニアの腹腔鏡手術を本年度から本格的に採用している。脱腸とも呼ばれる鼠径ヘルニアは小児の外科疾患の中で最も多く、約30人に1人の子どもに手術が必要だと推定されている。4月に赴任した小児外科部長の江村隆起医師は「それぞれ異なる患者さんの状況や意思を尊重して最良の手術方法を探りたい」と話している。

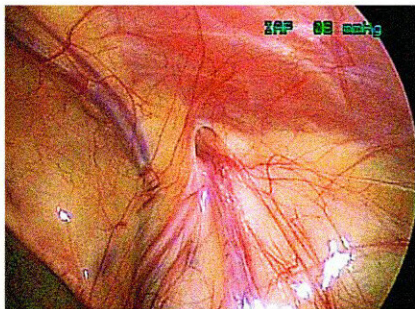
小児の鼠径ヘルニアは、ほぼ

江村 隆起
小児外科部長

従来法より傷が小さく

100%先天性のもの。自然に治癒することはまれで、原則手術が必要になる。両側に鼠径ヘルニアを発症し、2度の手術が必要になることもある。経過観察中にヘルニア門から脱出した腸などがおなかの中に戻りにくくなり、放置すると腸が壊死する恐れもある。

江村部長によると、腹腔鏡



手術はおへそを切開し、直径3ミリの筒状のカメラ（腹腔鏡）を入れて、おなかの中を観察しながら行う。患部の直上から刺した細い器具と、へその横あたりを3ミリのほど切開して入れる鉗子を使い、ヘルニア門に糸をかけて閉鎖する。

以前から行われている、ヘルニア門の真上の鼠径部の皮膚を2センチほど切開して患部まで切り進みヘルニア門に糸をかけて閉鎖する方法に比べ、傷が小さく、反対側のヘルニアの観察と治療が同時にできるメリットがある。

江村医師は、これまでに400件以上の腹腔鏡での手術を執刀。県立中央病院では今年6～9月に33人の小児の鼠径ヘルニア患者に対して腹腔鏡手術を実施した。従来の方々とともに手術は全身麻酔で行い、手術時間は約30～40分。2泊3日の入院期間が必要という。

腹腔鏡で観察した患部の様子。画面中央がヘルニア門（江村隆起医師提供）

第4木曜日に掲載します